大ヨーロッパ

中大生のレポート

経済学部
黒沼　勇史

最終回　政治統合への道のり

「東欧に拡大」の夢

二度の世界大戦で、互いに敵対してきた国々が歩み寄って築き上げてきた平和のシステム、EU（欧州連合）。ひとつの国のようにヒト、カネ、モノ、サービスの流れを自由化することによって加盟国を活性化させてきた繁栄のシステム・EU。しかし、統一通貨「ユーロ」が始まった現在でも、EUの行く手にある幾つかの問題点が、浮き彫りになった。それらをもう一度考え直し、このシリーズの締めくくりとしたい。

■平和機築の問題　二度の大戦は欧州から始まった。20世紀は戦争の世紀といわれ、そして世紀末になっても欧州から戦争は消えない。あるイギリスの老人は、ラジオ番組で「歴史のなかに置いてきた自らの体験を、コソボ難民のTV中継で見ているようだ」と語っていた。

EUは「ヨーロッパ連合」であって、「西ヨーロッパ連合」ではない。東欧諸国のEUへの加盟申請が進んでいる今、この平和と繁栄のシステムを東ヨーロッパにも拡大すべきである。NATO（北大西洋条約機構）を率いるアメリカは、ユーゴ問題解決後の利益よりコストが高くつくため、積極姿勢に欠けている。共通外交・防衛政策についての加盟国間の調整が急務である。

■通貨統合が抱える問題　EUが統一通貨ユーロを発行したことで、ユーロ加盟国（ユーロランド）の金利政策（禁輸・為替コントロールなど）は、欧州中央銀行が一手に引き受けることになった。また、税率決定をはじめとする財政政策は各加盟国の権限として残っているが、均一化が求められている。

ばらつく加盟国間の経済状況のなかで、一つの共通政策に対応することへの無理がいずれ大問題へと発展するだろう。例えば、好景気の加盟国と不景気の加盟国に、同じ金融政策で対応することに限界がある、と経済学者たちは警告している。

また、世界経済に対するユーロの強さは、ドイツのマルクの強さのおかげといわれているだけに、そのドイツ経済がいったん不況になると、ユーロランド全体が不況に陥るかもしれない。

■民主主義の欠乏　欧州会議は、ヨーロッパ市民に選ばれた議員によって構成されているが、この欧州会議は議会という名に反して、立法府として機能していない。代わりにEUの立法府としての権限を持つのは閣僚理事会と呼ばれ、加盟15ヵ国の国益の代表である、それぞれの国の大臣（閣僚）によって構成されている。

確かに、その大臣たちは各国で民主主義的な手続きを踏んで、選出された政治家であるが、国益の代表者である彼らが大きな影響力を持ち続ける限り、欧州全体の平和と繁栄を真に願う政治は行われないだろう。EUの次のステップといわれる「政治統合」への道は、いつ始まるのか。

■腐敗する官僚制　EUの行政府として機能する欧州委員会は、自国の国益を離れ、ヨーロッパのために働く公務員によって成り立っている。そこでは大臣、次官、国家公務員というような立場の人が働き、その大臣にあたる人々は20人で、官職名を「委員」という。

官僚制の必然か、この欧州委員会にも職権濫用などの腐敗があったようである。詳しい不正内容は公表されないが、3月には欧州議会によって、この「委員」20人全員に免職要求が出された。

大規模な組織であるがゆえに、このような問題点の解決は難しい。しかし、EUには無限の可能性がある、ということもまた忘れてはならない。有史以来、軍事的にも経済的にも隣接する国々と絶えず争い、対外的な警戒を怠らなかった国家は「国益獲得のため」に存在していた。

しかし、経済的には市場統合を通して、EU域内では自由貿易が達成されてきている。つまり、隣国と争うことによって国益を獲得するという国家の役割が、「大ヨーロッパ」の下で消え始めたのである。

※

欧州連合――それは50年という長い歳月をかけて、平和と繁栄を構築してきたシステムである。目前に迫った21世紀。EUがつくりだす新しい国家観が世界を変えるかもしれない。

（おわり）